# Reviews

Tokyo Nagoya Kobe Kyoto Osaka

## Tokyo

### 天野豊久

ギャラリーサージ

2.27-3.11

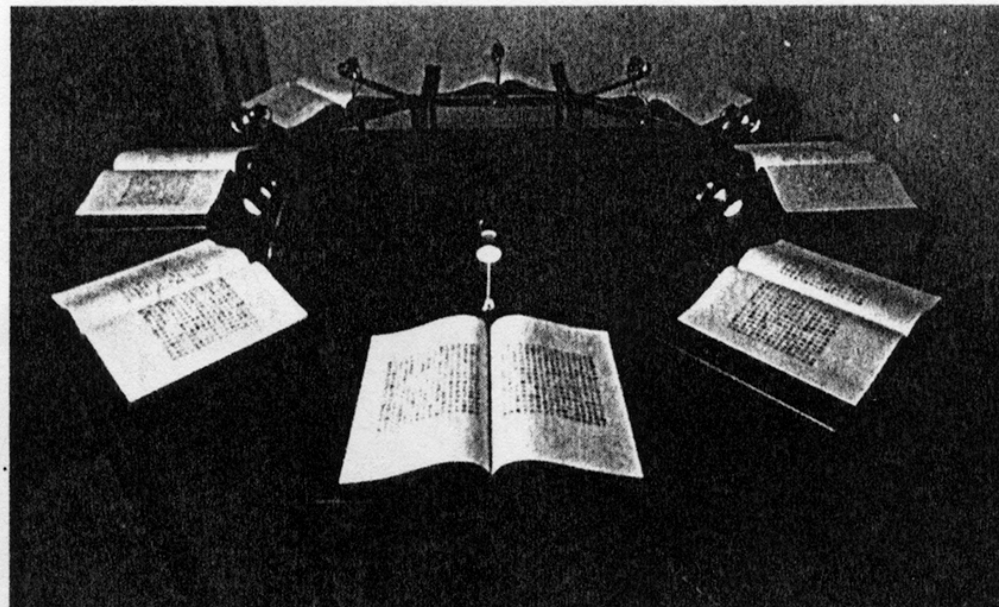
文字に表わされた言葉は、文字の数によって否応なく折り畳まれ、行の数によって分断されているが、そのことは一見伝達の機能にとってなんの役割も果たしていないように見える。言葉がますます消耗品として扱われるようになれば、文字は勝手に書き換えられ、文字の数によってもたらされた言葉の定形性は、なんの価値もないものとされてしまう。しかし、伝達すべき内容というものは、遡行的に想定された幻覚でしかない。言葉を個別的な伝達に極限化しようとしても、文字としての言葉の定形性が媒体の局所的構造を浮かび上がらせることにしかならない。

天野豊久は、文字や声をパネルやスピーカーを使って提示する作品をつくってきた。それは、言葉として自律できないほど個人的な文章を、パネルやスピーカーの配線の一定の形をとおして、直接公共的な場に伝達する作品である。今回の個展に出展されたのは、過去の作品と同じように個人的な想像を書き連ねた文章を使い、句読点を取り去り、文字を一定の割合で四方に回転させ、縦横十六文字に並べて十六頁にまとめ、前後を縦横八文字の文章の頁で挟んで製本し、それを開いて台の上に乗せ、その台を八個円周状に並べたインスタレーションである。

不規則に回転した文字のせいで、縦書きか横書きかもわからなくなっているが、よく注意して見ると読めないことはない。この読みにくさのなかに、この作家の文章の個別的な伝達が保護されている。ただ、通常は固有名である目次や題名と、所有名義である署名によって初めて封鎖され停止される文章が、はじめから一字一字保護されているような構造は、漢字という文字がもつ正方形の構造そのものである。そして、十六という数字は、日本語で通常使用する範囲の漢字をコード化するのに使われているビット数(二の乗数)である。

この作家は、この作品によって、個別的な伝達の原点を、媒体としての文字の生成の現場へと集約しようとした。しかし、分子構造を巨視的形態に拡張していく周期的結晶体のように、実際にはその構造は、日本語ワードプロセッサによる全角文字の正方形と十六ビットコードという媒体の構造を巨視的に拡張しているにすぎない。ともあれ、個別的な伝達は、非周期的結晶である文字言語と根本的に相容れないことだけは明らかなこととなった。

古屋俊彦



天野豊久　Toyohisa Amano
fermi　1995　会場風景
撮影＝酒井信一